

# 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する 学習・指導改善について

○「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導改善の視点(アクティブ・ラーニングの視点).....	1
・「深い学び」の視点と「見方・考え方」.....	3
・「対話的な学び」の視点.....	4
・「主体的な学び」の視点.....	5

# 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習・指導改善の視点（アクティブ・ラーニングの視点）

「総則・評価特別部会、小学校部会、中学校部会、高等学校部会における議論のとりまとめ（案）

（平成28年7月11日教育課程企画特別部会資料より）

## 5. どのように学ぶか（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）

- 各学校は「カリキュラム・マネジメント」を通じて、子供たちが「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を組み立てていくことが求められるが、このうち、「どのように学ぶか」の鍵となるのが、アクティブ・ラーニングの視点、すなわち子供たちの「主体的・対話的で深い学び」をいかに実現するかという学習・指導改善のための視点である。
- 社会で生きて働く知識や力を育むためには、子供たちが「何を学ぶか」という学習内容の在り方に加えて、それらの内容を「どのように学ぶか」という、学びの過程に着目してその質を高めていくことが重要である。世の中をどのような視点で捉え、どのような枠組みで考えたらいいいのかという、物事に対する見方・考え方を身に付けて深く理解したり、多様な人との対話で考えを広げたり、学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつけたりしていくという学びが実現されることによって、学校で学ぶ内容が、生きて働く知識や力として育まれることになる。こうした学びの過程が「主体的・対話的で深い学び」であり、こうした学びが実現するように、日々の授業を改善していくための視点を共有し取組みを活性化しようというのが、今回の改訂の主眼である。
- 教育方法に関するこれまでの議論においても、子供たちが主体的に学ぶことや、学級やグループの中で協働的に学ぶことの重要性は指摘されてきており、多くの実践も積み重ねられてきた。我が国では、教員がお互いの授業を検討しながら学び合い、改善していく「授業研究」が日常的に行われ、国際的にも高い評価を受けているが、そうした中で、子供が興味や関心を抱くような身近な題材を取り上げて、学習への主体性を引き出したり、少人数で対話しながら多様な考え方に気付かせたりするための工夫や改善が続けられてきている。こうした「授業研究」の成果は、日本の学校教育の質を支える貴重な財産である。
- 一方で、こうした工夫や改善の意義について十分に理解されないと、例えば、学習活動を子供の自主性だけに委ね、学習成果につながらない「活動あって学びなし」と批判される授業に陥ったり、特定の教育方法にこだわるあまり、指導の型をなぞるだけで学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている。
- こうした「主体的・対話的で深い学び」とは、特定の指導方法のことも、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むためにはどのような学びが必要かを絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていけるようにすることで、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実現しようとする営みなのである。

- 「主体的・対話的で深い学び」については、「論点整理」を踏まえたその後の議論を通じて、以下のように整理されている。
  - ・習得・活用・探究の見通しの中で、**教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげる「深い学び」**が実現できているか。
  - ・子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、**自らの考えを広げ深める「対話的な学び」**が実現できているか。
  - ・学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、**見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」**が実現できているか。

### （「深い学び」と「見方・考え方」）

（略）

- 「深い学び」とは、「習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげる」学びのことであると議論されている。その具体的な姿については、現在、中央教育審議会において検討中であるが、**学びの「深まり」の鍵となるものとして、全ての各教科等で議論されているのが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。**今後の授業改善等においては、この「見方・考え方」が極めて重要になってくると考えられる。
- 子供たちが、**各教科等の学習において、様々な知識や力を身に付けていく過程の中で、“どのような視点で物事を捉え、どのように思考していくのか”という、物事を捉える視点や思考の枠組みも鍛えられていく。**例えば算数・数学においては、事象を数量や図形及びそれらの関係に着目して捉えて論理的に考えていくこと、国語においては、言葉の働きを捉えて自分の思いや考えを深めたり表現したりしていくことなどである。
- **こうした「見方・考え方」は、各教科等の学習の中で活用されるだけではなく、大人になって生活していくにあたっても重要な働きをするものとなる。**私達が社会生活の中で、データを見ながら考えたり、アイデアを言葉で表現したりする時には、学校教育を通じて身に付けた数学的な見方・考え方や、言葉に対する見方・考え方が活用されている。いわば、頭の中の道具箱にある「見方・考え方」を活用しながら、世の中の様々な物事を理解し思考し、よりよい社会や自らの人生を創り出していると考えられる。
- この「見方・考え方」は、知識・技能を構造化して身に付けたり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように**関わるかの視座を形成したりするために重要なものである。すなわち、資質・能力の三つの柱全てに深く関わる、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の教育と社会をつなぐものである。**子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されると考えられる。（略）

# 道徳科の学習における主体的・対話的で深い学び

・習得・活用・探究の見通しの中で、**教科等の特質に応じた見方・考え方**を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげる「深い学び」が実現できているか。

## ○ 道徳科における「見方・考え方」の(案)

「様々な事象を、道徳的諸価値の理解をもとに自己との関わりで(広い視野から)多面的・多角的に捉え、自己の(人間としての)生き方について考えること」 (括弧内は中学校の記述)

## 「深い学び」の視点から、道徳科において求められる改善の例(案)

- 道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探究するプロセスを重視し、多面的・多角的な思考を促す主題の設定などを含めて、道徳科の特質を生かした学習活動の展開を構想すること。
- 主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや、読み物教材の登場人物の心情理解のみに終始する指導(「読み取り」指導)、望ましいと思われることを言わせたり書かせたりすることに終始する指導(「押しつけ」指導)などに陥らないよう留意すること。
- 多様な指導方法として、例えば、
  - ・読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習において、教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めること。
  - ・様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決する学習において、児童生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせること。
  - ・役割演技など、道徳的行為に関する体験的な学習を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うこと。
- 道徳的な問題場面には、①道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題、②道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題、③道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうできない自分との葛藤から生じる問題、④複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題などがあり、これらの問題構造を踏まえた場面設定や学習活動の工夫を行うこと。等

・子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

### 「対話的な学び」の視点から、道徳科において求められる改善等の例(案)

- 教材や体験などから考えたこと、感じたことをまとめ、発表し会ったり、話し合いなどにより異なる考えに接し、多面的・多角的に考え、協働的に議論したりするなどの工夫をすること。
- 様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決する学習において、グループなどで話し合い、何が問題となっているのか、問題をよりよく解決するためにはどのような行動をとればよいのかなどについて多面的・多角的に考えて議論を深めること。
- こうした学習ができるようにするため、日頃から何でも言い合え、認め合える学級の雰囲気をつくるとともに、教師が受容的な姿勢を持つこと。
- 様々な専門家や保護者、地域住民がゲストティーチャーとして道徳科の授業に関わり児童生徒と対話すること。
- 資料を通じて先人の考えに触れて道徳的価値の理解を深めたり自己を見つめる学習につながるような教材の開発・活用。
- 自分自身に問いかけ対話することを通じて、道徳的価値を深く理解したり、自己の生き方についての考えを深めること。

等

- 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

### 「主体的な学び」の視点から、道徳科において求められる改善の例(案)

- 自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めるためには、主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや、読み物教材の登場人物の心情理解のみに終始する(「読み取り」)指導、望ましいと思われることを言わせたり書かせたりすることに終始する(「押しつけ」)指導などに陥らないよう留意すること。
- 道徳科における問題解決的な学習は、一定の答えを見いだしたり合意形成をすることが目的ではなく、それを通して一人一人が気付いたことや感じたことを振り返る活動を取り入れること。
- 年度当初に自分の有様や課題を考え、課題や目標を捉える学習を行うことや、学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に集積(ポートフォリオ)し、学習状況を自ら把握し振り返られるようにすること。
- 児童生徒の発達段階等を考慮し、身近な社会的課題を取り上げることにより、自分との関係において考え、解決に寄与しようとする意欲や態度を育てること。
- 児童生徒が行う自己評価や相互評価を通じて、自身のよい点や可能性に気付いて主体的に学習に取り組む意欲を高めたり学習の在り方を改善したりすること。

等